

序

やとみ ゆたか
矢富 裕*

現在、わが国の臨床検査、特に検体検査を取り巻く状況が厳しいものであることは周知のとおりである。経済効率が重視されるあまり、コスト削減のターゲットとして臨床検査は縮小傾向にあり、包括医療の導入・推進によりその傾向はますます強くなっている。また、病院の検査室で行っていた検査の外注化の動きも進んでいる。しかし、臨床検査の現代医療における重要性は、それにも増して明らかなことであり、現在も新しい有用な検査が着実に臨床応用されている。とどまるところを知らない生命科学・医学研究の発展を考えると、今後、ますます、疾病の診断・病態の評価に役立つ新しい臨床検査が登場すると考えられ、その点では、臨床検査の未来は明るいと考えられる。

今回「新しい臨床検査・未来の臨床検査」と題する『検査と技術』増刊号を発行する案が本誌編集委員会から出されたのも、以上のような状況を踏まえ、臨床検査の重要性、将来性を再認識するためであった。筆者もその一人として企画構成に関与したが、そのねらいは単純・明快で、未来・将来性を感じさせるような臨床検査を選んで紹介させていただき、臨床検査の新しい息吹・将来性を読者に実感していただくことであった。

「総論」においては、臨床検査全般に関して、社会的側面も含めて将来展望的な記述を著者をお願いした。「各論」においては、個々の新しい検査をその方面の専門家に具体的に紹介していただいた。項目の選択に関しては、ある程度の客観性を保つために、主に、ここ5年以内に保険収載された検査、近い将来に保険収載されそうかまたは臨床に導入されそうな検査項目から本誌編集委員会内でピックアップさせていただいた。また、あまりに断片的な構成にならないように、ところどころ、「ノート」の形で知識の整理をしていただく形をとらせていただいた。

頁数の都合もあるため抜け落ちていた項目もあると思われるが、全体に目を通していただき、臨床検査の将来性を読者に感じ取っていただければ本書の目的は達成できたと考えている。例えば、筆者の専門である血液検査と遺伝子検査の分野では、造血管腫瘍の新分類として登場したWHO分類とそれに必要な臨床検査、教科書的な出血傾向鑑別のための血小板機能低下に加え、血栓症の予知・評価のために血小板機能亢進を評価することが課題となっている血小板機能検査、比較的最近まで診断に難渋していた血栓性血小板減少性紫斑病の診断を飛躍的に進歩させたvWF(von Willebrand factor, フォン・ヴィルブランド因子切断酵素(ADAMTS13)、より有用な新しい診断基準が模索されているDIC(disseminated intravascular coagulation, 播種性血管内凝固症候群)などを含め、新しい知見が盛り込まれ、最近の進歩と将来性を実感できるものとなっている。他の分野においても、大なり小なり同じように感じていただけるものと考えている。

本増刊号により、一人でも多くの読者が臨床検査の明るい将来性を実感していただくことができるならば、編集委員一同、この上もない喜びであります。

* 東京大学大学院医学系研究科臨床病態検査医学・教授 ☎113-8655 東京都文京区本郷7-3-1